

科学コミュニケーションの実践と規範 両者の架け橋

加納圭

科学コミュニケーション研究会 副代表
滋賀大学・京都大学 准教授

【主催】科学コミュニケーション研究会

【後援】一般社団法人日本サイエンスコミュニケーション協会

タイムスケジュール

15:30 ~ 15:40 趣旨説明

登壇者： 加納圭（滋賀大学・京都大学）

15:40 ~ 15:55 科学コミュニケーションの規範について

～サイエンスアゴラ2011:とことん話合い:科学コミュニケーション
は”独自の”分野か?より～

登壇者:菊地乃依瑠(サイエンス・メディアセンター)

15:55 ~ 16:10 科学コミュニケーションの実践について

～サイエンスアゴラ2012:科学の『押し売り』? -無関心層になぜ・
どうやって科学を伝えるのか- より～

登壇者:加納圭(滋賀大学・京都大学)

16:10 ~ 16:25 科学コミュニケーションの評価について

～サイエンスアゴラ2013:科学コミュニケーション活動の評価を考
えるより～

登壇者:高梨直紘(東京大学)

16:25 ~ 17:00 総合討論

司会:横山広美(東京大学)

はじめに

「科学コミュニケーションはかくあるべし(規範)」と「実際にはこのように行われている(実践)」との間には溝があるのかもしれませんが。それはどんな溝なのか、溝を埋めるには何が必要なのか、来場者の皆さんと一緒に考えます。科学コミュニケーション研究会が、過去3回のサイエンスアゴラで取り上げた内容(とことん話し合い「科学コミュニケーションは“独自の”分野か？」／科学の『押し売り』? -無関心層になぜ・どうやって科学を伝えるのか-／科学コミュニケーション活動の評価を考える)をご紹介するところからスタートします。

話題提供

道具的(instrumental):

主に科学コミュニケーション(SC)を実施する側の都合で行うSC
※どのような都合かは各登壇者及び総合討論の論点になり得る

実質的(substantial):

例えば、より多くの市民が科学技術リテラシーを身につけると日本の科学技術はより発展するはず、とかより多くの市民の参加によってより良い政策ができるはず、という考えに基づいて行うSC

規範的(normative):

SCはかくあるべしという考えに基づいて行うSC
※どのように「あるべき」かは各登壇者及び総合討論の論点になり得る